第二次世界大戦中のモスクワ放送

―モスクワからの日本語放送はいかにして開始されたのか―

島田　顯†

Moscow Radio during the Second World War

―How the Japanese broadcasting program from Moscow was started?―

Akira Shimada

Moscow Radio has started to broadcast programs in Japanese to Japan at 14 April 1942 after the Outbreak of Great Patriotic War（German–Soviet War）during WWII. Comintern（Communist International）has considered Moscow Radio to be one of the important part of Propaganda activities and intensified Radio Propaganda. In this way, how should be evaluated Japanese programs in Radio Propaganda of Comintern? The main objective of this study is to clarify background of beginning Japanese programs.

This paper consists of five sections: first, summary of study of Radio Moscow and Broadcasting in Japanese; second, Preparation of the Broadcasting of Japanese Programs in China, third, Preparation of the Broadcasting of Japanese Programs in USSR（in Moscow and Khabarovsk）; forth: Beginning of Broadcasting of Japanese Programs in Moscow: fifth: Generalization of Radio Broadcasting of Japanese Programs to Japan and future tasks.

1. はじめに

第二次世界大戦中の 1942 年 4 月 14 日に，モスクワ放送（正式には，VRK 全連邦ラジオ委員会＝ソ連人民委員会議附属無線設備・ラジオ放送委員会の対外放送，略称はイノラジオ）の日本語放送が始まった。前年の 1941 年 6 月 22 日に，大祖国戦争（ソ連・ロシアでの独ソ戦の呼称）が勃発し，ソ連領内を荒らしまわっていたドイツ軍を撃滅するために，ソ連国内が一つになっていた時代だった。しかもモスクワ近郊でのドイツ軍は撃退したものの，ドイツ軍は南方に戦線を拡大しており，予断を許さない状況にあったのである。コミンテルンとソ連国内にいた各国の共産党員もソ連を助け，また各国の反ファシスト活動を支援するために躍起になっていた。無線通信や，ラジオをはじめとするプロパガンダ活動も活発に展開されており，コミンテルンもその中で重要な役割を担っていた。このような状況の中で開始されたモスクワ放送の日本語放送は，ソ連・コミンテルンのラジオ・プロパガンダ活動の中でどのように位置づけられていたのだろうか。さらには戦後の 1946 年 12 月 3 日に，ハバロフスク放送局においても日本語放送が開始されたのだが，モスクワとハバロフスクという二つの日本語放送局を設ける意味は何だったのか。

† 関東学院大学経済学部講師

モスクワ放送の歴史について述べている文献には以下のものがある。『「一日の偉大な本」ソ連におけるラジオ』は，ソ連のラジオ放送の発達に関する史料を収めたもので，中でもミンツ論文は，ソ連のラジオ送信機開発の歴史をまとめている（«Великая книга дня...», 2007）。シマンチュークの小冊子は，モスクワ放送からモスクワ放送の後身であるロシアの声（現ラジオ・スプートニク）までの歴史を概括した（Симанчук , 2004）。特筆すべきは，放送局内の粛清に触れていることだろう。『全世界にとっておなじみの声』は，モスクワ放送の全歴史，大祖国戦争期のモスクワ放送，その他の各国語放送の歴史に関するものなど様々な論文を収めている（Голос, который знаком всему миру, 2009）。日本語放送についての論文もあるが，日本語放送の開始については述べられていない。『赤い電波　モスクワ放送ゐんま帳』は，戦後冷戦期のモスクワ放送のプロパガンダを分析したものであるが，当然ながら戦中の放送開始については皆無である（伊藤昌弘他，1985）。さらに，シベリア抑留者の便りを日本に向けて放送した木村慶一は，回想録で戦後直後に開始されたハバロフスク放送局について触れている。残念ながら，ハバロフスクの日本語放送開始に立ち会っていないために，開始の事情については全く述べられていない（木村慶一，1949）。モスクワ放送最初のアナウンサーであるムヘンシャンについて述べた拙稿は，モスクワからの日本語放送開始についても触れているが，ムヘンシャン本人に焦点を当てたために，放送開始の背景・事情を突っ込んで分析することはなかった。特に，日本軍の北進阻止の問題とゾルゲ事件との関連性を指摘したものの，その立証には至ってはいない（島田顕，2010）。日本語放送開始の事情についてはまだ不明な点が多いが，断片的に知りうることのできる史料がいくつか見つかった。これらわずかな新史料をもとに，今少し日本語放送開始の事情に踏み込んでみたい。

2.　中国における日本語放送の準備

モスクワからの日本語放送開始の前に，中国からの日本語放送の準備が始まっていた。中国からの日本語放送の準備に，コミンテルン及び日本の共産主義者たちは大いにかかわっていたのである。この放送局は，中国共産党による延安新華広播電台（『増補改訂　戦争・ラジオ・記憶』，2015，103，392–393，562–563）で，1940 年 12 月 30 日に放送を開始し，1941 年 12 月 3 日には日本語放送を開始する。この準備状況について述べているのが次の文書である。1940 年 8 月 20 日に，延安にいたリ・クイ［野坂参三の中国における偽名］は，日本語放送準備に関し，コミンテルン書記長のディミトロフに書簡を送り報告した（RGASPI, f. 495, op. 74, d. 622, l. 1–9., ВКП(б)..., 2001, 698）。

> 日本語のラジオ番組のために，日本のレコード（音楽）が我々には必要である。我々はそれらのレコードを香港で購入することを試みている。しかしながら，おそらく，このことはうまくいかないだろう。だから私はあなたに日本のレコードを送ることを依頼する。それらをキム・シャン［野坂龍のこと］（オカノ［野坂参三の偽名］の妻）があなた方に渡すだろう。蓄音機は我々には必要ない。［後略］

この文書は，ソ連からの放送を含めて，コミンテルンの中で日本語放送の準備開始を表す最初のものである。文書ではまず，中国での日本語ラジオ放送を先行して組織することが述べられている。一

般に，日本語放送には，日本国内向けのものと，中国国内の中国にいた日本人，特に中国戦線の日本人兵士向けのものが考えられるが，文書中の「日本語のラジオ番組」がどちらなのかはわからない。だが，中国共産党がソ連から譲り受けた送信機の出力がわずか 300 ワットという小出力だったことから（『増補改訂　戦争・ラジオ・記憶』，2015，392–393），日本に届くように放送することは困難だったので，中国国内の限られた範囲にしか向けることができなかったのである。

さらに 1941 年 1 月 23 日，26 日付で，リ・クイは延安から，ディミトロフに宛てて書簡を送り，中国におけるラジオ放送の準備状況について報告した（RGASPI, f. 495, op. 74, d. 622, l. 26–27, 30., ВКП(б)..., 2001, 706–710）。

> 日本語のラジオ番組は 2 月から始め，一週間に一回放送が行われることになるだろう。試験的番組を我々は既に開始している。ラジオ放送局の遠隔性，現在要員の不足により，番組は週 1 回のみ可能である。しかしながら，一〜二か月後には毎日放送できるよう努力しているところである。［番組の］内容は，内外のニュース，諸事件に対する我々の見解，このことに関する我々の説明である。技術的に可能ならば，前線にある日本人兵士向けのスローガンを放送することを試みるつもりである（このことを我々は，東京からの放送が行われているまさに同じ時間に行うつもりである）。中国語での日本に関する番組を我々は別個に行っている。
> ［中略］
> 1941 年 1 月 23 日付の書簡の追加，1941 年 1 月 26 日
> ［中略］
> 日本語のラジオ番組について。二月は試験である。毎週金曜日に，20 時（香港時間で）から 30 分間，10000 kc/s（30 メーターバンド）の波［周波数］で放送するつもりである。近いうちに，毎日番組を放送するつもりである（日本国内では短波放送の聴取は禁止されているから，これらの番組は主に中国にいる日本人，兵士に向けられている）。内容は主に最近のニュースと，状況の概観である。

この文書から，コミンテルン，ソ連が関与し，中国国内において準備されていた延安新華広播電台の日本語放送は，主として中国戦線で戦っている日本人兵士に向けられたもので，日本国内向けの日本語放送ではなかったことがわかる。しかもこの放送は，NHK の中国戦線向け日本語放送に明らかに対抗するものだった。中国国内の前線兵士に向けた日本語放送は，前線兵士に敵前逃亡をよびかけることを主目的としており，日本国内に向けた放送は，日本国内の反政府運動の活発化を狙ったもので，同じ日本語放送でも方針が全く異なっていることはいうまでもない。しかし大祖国戦争が勃発すると，日本語放送も変化を余儀なくされる。つまり日本国内に向けた日本語放送が求められるようになった。その日本語放送の方針転換を示しているのが次の文書である。

ディミトロフは，1941 年 10 月 29 日に，リ・クイと中国共産党に宛てて書簡を送り，日本共産党の諸課題を示した（Коминтерн и вторая мировая война, 163–164）。

> 日本の軍部がソ連に対し極東から攻撃することを準備しつつあるという現在の瞬間において，

あなたは主に日本国内における反軍事活動の展開に注意を向けなければならない。この目的のために，可能なあらゆる方法，手段を利用しなければならない。特に重要なことは，中国における日本語でのラジオ放送を利用することである。日本向けのラジオで日本の軍事捕虜たちの出演を組織することが必要である。貴方自身が出演可能ならば，偽名での出演もありうるだろう。日本向けラジオ番組では，ファシストドイツのために，日本人民がソ連に対する戦争に駆り立てられており，日本軍兵士たちがヒトラーのドイツが世界の支配者になることを達成するために自らの血を流す必要はないという命題を論証しなければならない。ヒトラーの勝利が日本の利害に叶ったものとはならない。反対に，ヒトラーの勝利は日本人民の生命の利害を脅かすことになるだろう。ソ連との戦争の場合，日本軍がシベリアに自らの墓穴をほることになり，日本の各都市は極東のソ連空軍により破壊され，日本軍が耐え抜くことができない三つの強国，即ちソ連，アメリカ，イギリスの力強い連合を日本が自らに対し持つことになるだろうことを説かなければならない。総じて，日本国内での強い動揺を作り出し，支配層の間で存在する反目を深化し，ソ連との戦争に反対する，可能なより大きな運動を展開することに努力しなければならない。この意味で，日本の愛国主義者グループの名で日本人民に向けた特別アピールを行わなければならない。中国共産党中央委員会と交渉し，この方針でエネルギッシュに行動すべし。

ディミトロフ

1941 年 10 月 23 日

この文書は，中国における日本語放送に関するものだが，中国にいる日本人兵士に向けた放送に関するものではなく，明らかに日本に向けた放送を想定したものである。まさに日本国内向けの日本語放送開始の動機（意義）がここに述べられているのである。つまり，日本国内の有志の日本人に働きかけ，日本政府に反対する動きに駆り立てようとするものだった。これはまさにゾルゲとは対照的な方法であり，文書から日本語放送がまさにゾルゲ事件と表裏一体をなしていることがわかる。すなわち，ゾルゲが直接的な北進阻止，またはそのための情報収集であるとすれば，日本語放送はソフトで，間接的な北進阻止，ソフトな工作手段であった。しかしながら，ゾルゲの活動は情報収集・報告に限られるが，日本語放送は，間接的なものにとどまらず，世論をうまく操作すれば，反政府活動から政府転覆へとつながる大きな可能性を持つものであったといえよう。

また文書は，当初はソ連からではなく，中国から日本に向けて放送しようとしていたことを示している。中国からの放送は，もちろんソ連からの送信機移送などの技術供与があって可能だったといえよう。それではなぜ，中国国内からの日本向け日本語放送の準備を中止し，後にモスクワから放送が行われることになったのか。まず，ソ連から送られた送信機が小出力で，日本に電波を届けるのには無理があったことが考えられる。それならばなぜ，小出力の送信機ではなく大出力の送信機を譲り受けられなかったのか。それは小出力の方が持ち運びしやすいからである。大出力の送信設備となれば，アンテナ等の機材も大型化し，建設も必要となる。時間，資材，人員，費用もかさむことになる。加えて当時の中国は，日中戦争の最中で日本との戦闘状態にあり，放送設備が日本軍によって占拠・没収され，ソ連側の関与を示す事実（例えば，ソ連国籍のラジオ放送スタッフの拘束など）があらわになってしまうことを恐れたのだろう。当時はまだ日ソ中立条約が有効であったからだ。または，単

に安全に放送設備を設置できる適当な場所を見つけ出すことができなかったこともあるだろう。もちろん，コミンテルンとソ連が関与しない中国からの日本語放送，そしてソ連，コミンテルンが後押しする日本向けではない日本語放送も行われている（『増補改訂　戦争・ラジオ・記憶』，2015，102–114）。

結局，コミンテルンとソ連が関与した中国からの日本向け日本語放送は実現せず，中国からの放送は，中国戦線の最前線にある日本人兵士たちのみに向けられたようだ。1940 年 8 月 20 日付文書でもわかるように，日本語放送の準備には大変な困難を伴っていた。また中国国内の戦況悪化もあり，日本国内向け放送は頓挫したのだろう。前線兵士に向けた放送は可能だったが，日本国内に向けた放送は，当然ながら大出力の送信機が必要となる。中国国内の状況から，入手は困難だった。

前述したように，準備が進められていた日本語放送は，まず中国案が先行し，主に中国国内にいる日本人兵士に向けた放送として準備が行われていたが，日本語放送に関する方針転換が図られ，日本国内向け放送も準備されることとなった。さらに中国案に加え，モスクワ，ハバロフスク（コムソモリスク・ナ・アムーレ）の案が浮上し，三つの案が並行して準備が本格的に行われるようになったが，その後中国からの日本向け日本語放送準備が頓挫したために，ソ連国内からの日本向け日本語放送を本格的に準備することになる。

3.　ソ連国内における日本語放送の準備

大祖国戦争勃発とともに，ヨーロッパ戦線のドイツ，イタリアなどの枢軸諸国，中立諸国，被占領諸国に向けた様々な秘密ラジオ放送（以下，特別ラジオ放送）が開始され，公式の国外向け放送であるモスクワ放送も戦争に特化した放送となった。特別ラジオ放送などのラジオ・プロパガンダ強化とともに，モスクワ放送の日本語放送の準備も本格化した。1941 年 10 月 23 日付文書に見られるように，このことは日本向け日本語放送の目的意識，位置づけの明確化を受けたものである。さらにドイツ軍がモスクワに兵を進めると，東方から，つまりは背後から日本との戦いが迫っているという意識が高まってきた。前述したように，日本に対するソフトな工作手段として，日本語のラジオ放送が重視されたのである。日本語放送の準備については，これまでいつ始まったのかははっきりとした形ではわかっていなかったのだが，中国国内のものを含めれば，1940 年 8 月 20 日付文書に見られるように，かなり前から始まっていたことがわかる。重要なことは，1941 年 10 月 23 日付文書にあるように，受信体制をも組織しようとしていたことと，ラジオ放送の聴取者を増やそうとしていたことである。このような姿勢は前述の特別ラジオ放送と同一である。

しかしながら，1941 年 10 月にモスクワにドイツ兵が迫ると，モスクワの官庁，その他はウラル山脈周辺に避難し，コミンテルンの機能の大部分もウファ（バシュキル自治共和国首都）に避難・疎開を余儀なくされる。コミンテルンも特別ラジオ放送やモスクワ放送などのプロパガンダ活動も，疎開問題で混乱していた。疎開先で日本語放送を開始するということも計画されていたようだが，モスクワ攻防戦が一段落したために，ウファからの帰還後に日本語放送の準備が再開された。モスクワ攻防戦と日本語放送開始の関連性について，モスクワに対する危険がなくなってからの日本語放送の開始は解せないとの見方があるが，一段落したとはいえ，日本がどちらに転ぶかわからない状況にあり，日本語放送をやる意義は確実にあったといえよう。

1941年12月16日に，コミンテルン執行委員会（以下IKKI）職員のヴィルコフ，プルィシェフスキーは，避難先のウファから，ディミトロフに宛てて，日本語番組用ラジオ編集部創設に関する書簡を送った。この文書は，ソ連国内での日本語放送に関する最初のものである（RGASPI, f. 495, op. 74, d. 622, l. 55–56., ВКП(б)..., 706–710）。

極東における尖鋭化した状況に際し，日本に関する次の組織的措置をあなたに提出し，検討・裁量を仰ぎます。

1. 次の者たちからなる日本語番組用ラジオ編集部を作ること。

a）プルィシェフスキー（編集長）

b）キム・シャン（編集員）

v）片山やす（アナウンサー）

g）キム・ギ・ウン（翻訳者）

d）ムヒンシャン（写字，書写）

注意：片山は現在フェルガナ［ウズベキスタン共和国東部のフェルガナ州の州都，当時，片山が勤務していた科学アカデミー東洋学研究所はフェルガナに疎開していた］にいる。キム・ギ・ウンとムヒンシャンはエンゲルス［ボルガ川中流域，サラトフ州の都市］にいる。

2. 日本語のラジオ聴取をこの目的から組織すること。

a）キム・シャン

b）片山やす

注意：日本国内でのラジオ聴取は，長波，中波で行われていることから，ラジオを聴取するための追加設備はすでに確立されている。二日間の活動で，東京の放送はまだ聴取することができていない［以下略］。

日付から，ソ連での日本語放送開始の五か月前からすでに準備が行われていたことがわかる。1941年10月29日付文書とは異なり，人事面が具体化されており，かなり実際的な準備といえる。前述したように，このときコミンテルンは，ウファに避難しており，この文書の発信元もウファである。少なくとも，ウファに送信機を運んだことから，モスクワの状況が改善されない場合，ウファから日本語放送を開始することも不可能ではなかった。日本語放送のキーパーソンとなるムヘンシャンとキム・ギ・ウンもモスクワではなく，エンゲルスにいたことから，ウファで日本語放送を開始する可能性もかなり高かったといえる。

「日本国内でのラジオ聴取は，長波，中波で行われていることから」という部分から，日本の事情に合わせて聴取率を高めるために，あらゆる可能性をとらえていることがわかる。日本では短波放送の受信が禁止されており，短波よりは長波・中波での放送受信が一般的となっていることを考慮したのだろう。

ちなみにヴィルコフは，1939年から1943年まで，IKKI機構内の職員で，IKKI人事部長を務め，東方諸国を担当していた。プルィシェフスキーは，キム・シャン，ムヘンシャン，片山やすとともに日本語放送編集部（日本語課）を構成していた人物である。加えてプルィシェフスキーは，1940年

3 月から IKKI 人事部上級調査官を務めており，1941 年 9 月より東方諸国とアングロ・アメリカ諸国担当の人事部副部長となり，1941 年 11 月より IKKI 機構内党委員会書記であった。片山やすは，片山潜の長女で，ソ日協会会長を務めるなどモスクワで活動していた。キム・シャンについては，外国労働者出版所（後の外国図書出版所，プログレス出版所）に勤務していたことがわかっている。ムヘンシャンも外国労働者出版所に勤務していた（島田顕，2010，121–135）。キム・ギ・ウンについては不明である。

さらに，1941 年 12 月 16 日付文書の三日後の 1941 年 12 月 19 日付で，全連邦共産党（ボ）（以下 VKP）中央委員会政治局会議は，「英語，中国語の放送組織とアメリカ合衆国，日本，中国の政界に関するタス通信の情報について」という決定を行った（RGASPI, f. 17, op. 3, d. 1042, l. 337., Политбюро..., 2000, 234）。

VKP 中央委員会は，最近の大出力ラジオ局のモスクワからの避難に際し，アメリカ，中国，日本で，モスクワからのラジオ番組が聴取されていないこと，さらにはタス通信の路線に沿ったアメリカ，日本，中国の政界に関する情報の受け入れがかなり困難なことになっていることを指摘，このような状況を改善するために，次のような決定を行っている。

1. ソ連人民委員会議［閣僚会議］附属ラジオ設備・ラジオ放送委員会（ポリカルポフ同志）に，コムソモリスク［コムソモリスク・ナ・アムーレ］（ハバロフスク地方［クライ］）における英語，中国語，日本語でのラジオ放送組織の義務を負わせること。
2. タス通信（ハヴィンソン同志）に，コムソモリスク・ポイントでのアメリカ合衆国，中国，日本からの政治的情報のラジオでの［無線での］受け入れを組織することを続けさせること。
3. 前記活動を組織するため，ラジオ委員会とタス通信に，有能で，審査済みの職員たちを，コムソモリスクに派遣すること。
4. ソ連通信人民委員（通信大臣，ペレスィプキン同志）に，テレグラフで毎日少なくとも 10 ページのテキストを，モスクワからコムソモリスクへ伝える義務を負わせ，反対に，ラジオ委員会とタス通信に，モスクワ・コムソモリスク間のテレグラフによる通信の双方向の回路を提供する義務を負わせること。
5. VKP ハバロフスク地方［クライ］委員会に，これらの決定の実現で，ラジオ委員会とタス通信に必要な援助を行うよう提案すること。

当時，コムソモリスク・ナ・アムーレからは，中国，日本，アメリカ合衆国向けの番組が放送されていた。日本向けということは，モスクワで制作された放送番組の中継電波のことである。日本語放送開始以前の決定なので，英語放送，その他ということになる。しかしながら，この文書で述べられているのは，モスクワからの放送の中継電波のことだけではない。もちろんモスクワからの電波の中継も行われていたが，文書はモスクワの放送局とは別の，ハバロフスクでの放送局開設，そして番組作りの必要性を述べているのである。つまり，日本語放送だけでも二系統の放送が考えられていたことを意味している。

要するにこの文書は，モスクワ放送局の日本語放送の開始とともに，ハバロフスク放送局の開局と

日本語放送の開始を最終決定したものといえるだろう。加えて，ハバロフスク放送局の開局の動機もわかる。つまり，アメリカ，日本，中国の政界に関する情報の受け入れが困難となっていることから，放送聴取情報の組織的，かつ定期的な交換の必要性に迫られていたことである。ハバロフスク，もしくはコムソモリスク・ナ・アムーレにラジオ局を設置する理由は，アメリカ，アジア，極東の情報を得ることであり，こちらの方が番組の放送よりも大きかったことがわかる。1941 年 12 月 16 日付文書からわずかに 3 日しか経っていないが，ハバロフスク案が浮上してきた。

モスクワかハバロフスクかという問題は別として，この文書は，ソ連国内で日本語放送を開始することを，VKP で承認，最終決定したものといえる。ただし，モスクワとハバロフスクのどちらを先行して開局させるのかは，文書からはわからない。同時進行することもありえただろう。さらにいえば，1941 年 12 月 19 日付文書ではハバロフスク案が大きくクローズアップされているので，ハバロフスク案の先行ということも考えられる。

日本語放送準備を証拠づけるさらなる文書がある。ディミトロフは日本語放送について，VKP 中央委員会政治局会議決定の二か月後となる 1942 年 2 月 9 日付で，自身の『日記』に次のように記している（Димитров, 1997, 276, Dimitroff, 2000, 482）。

> 1942 年 2 月 9 日
> プルィシェフスキー，キム・シャン，ミ，フリードリフ
> 日本語ラジオ聴取を組織すること
> 日本に対するラジオ放送を準備するために（特別に）

この文書でもやはり，日本語放送の準備とともに，日本でのラジオ放送聴取について述べられている。つまり，モスクワ放送の日本語放送を，日本国内で聞くことを呼びかけようとするものである。

文書ではキム・シャンのみが挙げられ，片山やす，ムヘンシャンの名前はない。また，ミについては朝鮮人，朝鮮語放送編集部の職員であること以外不明だが，この人物が挙げられていることにより，日本語放送の準備と同時進行で，朝鮮語放送の準備もすでに行われていることがわかる。さらにフリードリフ（別名ゲマインダー，またはベドリッヒ）は，チェコスロヴァキア人で，1941 年から 1942 年にかけて機能した 16 の言語による放送番組の総編集部（1942 年末から 1943 年初めに出版・放送部に統合される）を，エルコリ，ゴットヴァルド，フュールンベルグとともに束ねていた（Адибеков и др., 1997）。

4.　日本語放送の開始

1941 年 12 月 16 日付文書とは異なり，ムヘンシャンが最初のアナウンサーとなった。だがムヘンシャンが第一号アナウンサーであったことを岡田嘉子が証言しているが（岡田嘉子，1983，1986，1999），このことを証拠づける文書はない。ムヘンシャンが第一号のアナウンサーとする状況証拠として，片山やすの問題がある。1941 年 12 月 16 日付文書では，片山やすが当初はアナウンサー候補だったのだが，当時片山やすは，ソ日協会の仕事で多忙を極めており，アナウンサーを恒常的につとめることができなかったようだ（Диванидова, 2011, 54–55，片山やす他，2009，65–75）。さらには，

東洋学研究所の日本語教師の仕事から離れられなかったし，疎開先がウラル山麓近辺よりもさらに遠隔地のフェルガナだったことで，モスクワに近いエンゲルスにいたムヘンシャンよりも，モスクワへの帰還が遅れたのではないだろうか。おそらくこれが逆転した理由だろう。しかしながら，後に片山やすもアナウンサーをつとめていたことから，片山やすが完全にアナウンサーの仕事を離れたわけではなかったし，ムヘンシャンとの完全な逆転というわけではなかった。

ところで野坂龍についてだが，翻訳員だった野坂龍は，コミンテルン関係の外国人の宿舎となっていたホテル・ルクス（後にツェントラーリナヤと改称）の自室で，翻訳作業をしていたという。この時代の翻訳員とアナウンサーは完全分業制で，それぞれ別の人物が担当していた。つまり，アナウンサーは翻訳を担当することはなかったし，翻訳者は翻訳業に専念し，アナウンス業務を行うことはなかったのである。いずれにせよ，野坂龍，ムヘンシャンの放送局勤務では，野坂参三が大きな役割を果たしたことは間違いない。ムヘンシャンは自身の出生を隠していたことから，弾圧の恐怖を常に身近に感じていたが，野坂参三の絶妙な弁護によってムヘンシャンは救われた。だから，ムヘンシャンと野坂との密接な関係は想像に難くない（島田顕，2010，121–135）。そして，常にコミンテルンと行動を共にしていた野坂龍の名前が挙げられていることから，モスクワ先行で決着したのだろう。

日本語放送は，1942 年 4 月 14 日にモスクワで開始された。当初はプラウダの原稿，時事解説のみで娯楽的な要素は全くなかったという。また，日本語放送開始と同時に，朝鮮語放送も開始された。前述したように，準備から開局まで，朝鮮語放送は日本語放送と軌を一にしている。

これに対して，モスクワ放送のハバロフスク放送局からの日本語放送は，戦後の 1946 年 12 月 3 日に開始された。ロシア国家テレビラジオ委員会フォンド職員のザスコによれば，この頃，アジア太平洋諸国，特に中国，インド，日本，朝鮮，ベトナム，ラオスやアメリカ西海岸などで，ソ連への関心，特にモスクワからの情報への関心が急速に高まっており，このことを背景にソ連政府は，1946 年初頭に，モスクワ放送の支局をハバロフスクに開局することを決定した。決定に基づき，極東地域にある通信省傘下の各企業が新たな送信所を建設した。第二次世界大戦中にコムソモリスク・ナ・アムーレで活動した VRK 対外放送局作業班の経験が，送信所建設に生かされたとザスコは述べているが，それらの経験が具体的にどのようなものかは不明である。ハバロフスク放送局の職員はウズベキスタンのタシケント，カザフスタンのアルマ・アタ，その他の近隣諸国で集められた。また，サハリンのユジノサハリンスクで発行されていた日本語新聞である『新生命』新聞（旧『樺太新聞』）の廃刊後，日本人職員がハバロフスクの外国放送作業班の職員として確保された。また VRK は，ハバロフスク支局に関する第 1 号命令で 32 人の職員を承認する。1946 年 12 月 2 日付第 4 号命令では毎日 30 分の日本語放送が承認，翌 12 月 3 日に放送が開始され，同年 12 月 19 日付第 11 号命令で朝鮮語と中国語による一日 30 分の放送が 12 月 20 日から開始された。

5. おわりに

当初，ソ連国内の日本語放送は，モスクワ，ハバロフスク双方で，ともに準備が進められていたが，両者を比べるとハバロフスクの重要性が圧倒的に大きかったことは，1941 年 12 月 19 日付文書によってわかっている。しかしながらハバロフスク局は，モスクワ局と同時に開局ができなかった。つまりモスクワ案が先行したのである。その理由として，ドイツ軍のモスクワ占領の危険性がなくな

り，ウファなど避難先からの幹部，職員たちがモスクワに帰還するなど，モスクワで日本語放送を開始する条件がそろったことに対して，極東は情報収集の点では申し分なかったが，日本人アナウンサーなど放送に従事する人員の確保が開局までに間に合わなかったことが考えられる。だが戦後，抑留者などからの人員確保が可能となり，ハバロフスク局も開局に漕ぎつけることができるようになる。モスクワ放送の日本語放送は，特別ラジオ放送ではなかったが，日本語放送の位置づけはそれと同様であり，コミンテルンの中では重要視されていたといえる。

以上，新たに発見された史料により日本語放送開始の事情を若干検討した。今後の課題として挙げられるのはまず，証拠となる史料のさらなる調査，発見である。片山やす，野坂参三，野坂龍らの動きを知ることも重要である。朝鮮人，特にキム・ギ・ウン，ミらのさらなる情報も必要だ。さらに日本語課を束ねていたと考えられるプルィシェフスキーの役割も見なければならない。組織としては，ソ連国家側の通信人民委員部，VRK，外国図書出版所の活動もとらえる必要がある。それらのミッシングリングを一つ一つつなげていくことによって，全体像があらわになるのである。

参考文献

Г. М. Адибеков, Э. Н. Шахназарова, К. К. Шириня, *Организационная структура Коминтерна 1919–1943*, М., 1997.

ВКП(б), Коминтерн и Япония 1917–1941, М., 2001.

Е. Диванидова, *Дочь японского революционера* , М., 2011.,

Георги Димитров, *Дневник* (*9 март 1933–6 февруари 1949*), София, 1997.

Голос, *который знаком всему миру*, *Российскому Иновещанию—80 лет !*, М., 2009.

Коминтерн и вторая мировая война, часть 2, после 22 июня 1941г., М., 1998.（日本語版：『資料集　コミンテルンと日本共産党』（和田春樹／G・M・アジベーコフ監修，富田武／和田春樹編訳，岩波書店，2014 年））

А. Л. Минц, Начало пути. Радиостанция ВЦСПС, в кн. *« Великая книга дня...» Радио в СССР*, М., 2007.

Политбюро ЦК РКП(б)–ВКП(б) повестки дня заседаний 1919–1952, *Каталог*, Том 3, 1940–1952, М., 2000.

И. Симанчук, *Голос России*, *Документально-публицистическое повествование*, М ., 2004.

Georgi Dimitroff, *Tagebuecher 1933–1943*, 2000.

伊藤昌弘，森本真章『モスクワ放送ゐんま帳　赤い電波』（山手書房，1985 年）

岡田嘉子『心に残る人びと』（早川書房，1983 年），『ルパーシカを着て生まれてきた私』（婦人画報社，1986 年），『悔いなき命を』（日本図書センター，1999 年）

片山やす他『わたしの歩んだ道　父片山潜の思い出とともに』（エリザヴェータ・ジワニードワ編，小山内道子編訳，成文社，2009 年）

木村慶一『モスクワ・日本・ハバロフスク—対日モスクワ放送員の手記—』（川崎書店，1949 年）

島田顕「ムヘンシャン—モスクワ放送最初の日本人アナウンサーの軌跡」『早稲田大学アジア太平洋討究』第 14 号，2010 年 3 月，121–135 頁

『増補改訂　戦争・ラジオ・記憶』（貴志俊彦，川島真，孫安石編，勉誠出版，2015 年）